

名誉教授中村喜和主要著作目録

本目録には一九九五年三月までの主要な著作を収める。新聞に発表したもの、辞典項目などは省略した。刊行地が東京の場合は特記しない。

一九五八年（昭和三十三年）

〔研究ノート〕 ロシア文字の成立について——ソヴェトの最近の諸論文から『スラヴ文化研究』一号、三三—五六頁。

一九六〇年（昭和三十五年）

〔書評〕 N・A・メシチェルスキイ『古代ロシア語訳におけるヨセフス・フラウィウスのユダヤ戦史』（モスクワ、一九五八）『一橋研究』六号、七五—八三頁。

一九六一年（昭和三十六年）

〔研究ノート〕 「ルーシの地の滅亡の物語」について——付試訳『スラヴ研究』五号、札幌、七三—九五頁。

〔翻訳〕 K・G・パウストフスキイ「雨の夜明け」金子幸彦

編『ロシア短篇名作集』、学生社、三一九—三四六頁。

一九六二年（昭和三十七年）

〔紹介〕 Изучение древнерусской литературы в Японии. (木村彰一と共同執筆) *Труды отдела древнерусской литературы*. T. 18. M.-L., C. 582-586.

〔書評〕 M・N・チホミロフ編『クリコヴォの戦についての諸作品』（モスクワ、一九五九）『一橋論叢』四八卷二号、一二—一九頁。

一九六三年（昭和三十八年）

〔研究ノート〕 女公オリガ——原初年代記の記録から『窓』八号、一一八頁。

一九六四年（昭和三十九年）

〔書評〕 B・A・ルイバコフ『古代ロシア、説話、フイリーナ年代記』（モスクワ、一九六三）『一橋論叢』五二卷六号、一〇六—一四頁。

一九六六年(昭和四一年)

〔論文〕あるロシア歌謡の歴史——いわゆる「ソフィアの歌」について『言語文化』三号、一五一—五五頁。

〔研究ノート〕ロシアの「ディゲニス・アクリタス」——中世ロシアの翻訳作品に寄せて『一橋論叢』五六巻一、六二—七二頁。

〔紹介〕Изучение древнерусской литературы в Японии. *Труды отдела древнерусской литературы*. T. 22, M.-L., C. 463-468.

〔書評〕Y・K・ベグノフ『ルーシの地の滅亡の物語』(モスクワ・レーニングラード、一九六五)『スラヴ学論集』一号、六九—七七頁。

一九六七年(昭和四二年)

〔研究ノート〕馬場佐十郎と「魯語」『日本ロシア文学会会報』一〇号、一一—二〇頁。

一九六八年(昭和四三年)

〔論文〕おろしや盆踊唄考『一橋論叢』六〇巻一、三六—三七頁。

比較か変身か——「イーゴリ軍記」のある修辭技法についての覚えがき『スラヴ学論集』二、四〇—五〇頁。

ロシアの東方進出と日本の漂流民『日本庶民生活史料集成』五、『漂流』三二書房、八五九—八六三頁。

〔研究ノート〕「イーゴリ軍記」の文体——「古き言葉」の意

味について『一橋論叢』五九巻一、九三—一〇一頁。

〔書誌〕ロシア文学語学関係文献目録資料(一九六六、一九六七年)『スラヴ学論集』二、二〇—一三八頁。

一九六九年(昭和四四年)

〔研究ノート〕「聖なるロシア」以前『一橋論叢』六一巻二、一九—二六頁。

癡癡行者覚書『言語文化』六、三—二六頁。
オホーツクの古謡『一橋論叢』六一巻五、一〇六—一四頁。

〔紹介〕“Слово о полку Игореве” в Японии. *Труды отдела древнерусской литературы*. T. 24, M.-L., C. 42-47.

一九七〇年(昭和四五年)

〔論文〕橋耕齋伝『一橋論叢』六三巻四、一三八—一六八頁。(のちに『チーラシア』二、一九七、一二〇—一四五頁に再掲)

Эпизоды из истории ранних русско-японских отношений. О нескольких русских песнях, привезенных в Японию в 18 и 19 вв. *Hiotobaski Journal of Arts and Sciences*. Vol. 11, No. 1, pp. 1-12.

〔書評〕V・G・グザノフ著『白ロシアのオデッセウス』(モスクワ、一九六九)『ロシア語ロシア文学研究』二、一〇〇—一〇四頁。

〔編訳〕『ロシア中世物語集』（筑摩叢書一六八）、筑摩書房、四二四頁。

一九七二（昭和四六年）

〔翻訳〕M・レールモントフ『現代の英雄』、『新集世界の文学』九、『ゴーゴリ・レールモントフ集』、中央公論社、二一三—四〇六頁。

一九七二年（昭和四七年）

〔編纂〕『魯西亜辨語』（亀井高孝、村山七郎と共同編纂）、近藤出版社、三二—二四頁。

〔論文〕瀬沼夏葉 その生涯と業績 『一橋大学研究年報 人文科学研究』一四号、一七八頁。

〔研究ノート〕Первые русские поэты у японцев. *Hirotsukashi Journal of Arts and Sciences*. Vol. 13, No. 1, pp. 45-53. 文化年間におけるロシア詩の翻訳 『一橋論叢』六八巻三三—三八頁。

一九七三年（昭和四八年）

〔研究ノート〕ロシア水兵の墓誌 『言語文化』一〇号、七三—七八頁。

一九七四年（昭和四九年）

〔論文〕Капитан Дайкокуя Колаю—первые страницы истории японо-русской дружбы. *Япония сегодня*. No. 18, C. 52-56.

ロシア民衆叙事詩における地中海世界 『一橋論叢』七二巻六号、一九—二五頁。

ゴロヴニン少佐の日本観察——民族理解のひとつの場合 『民族文化』一〇巻一号、三四—四一頁。

〔エッセイ〕フィリーナへの招待 『窓』八号、二—八頁。

一九七五年（昭和五〇年）

〔編纂〕『博友社ロシア語辞典』（木村彰一他と共同編纂）、博友社、一四八頁。

〔論文〕Первые сведения о русской поэзии у японцев. *Вопросы литературы*. M., No. 7, C. 222-229.

〔研究ノート〕安芸国漂流民将来のロシア歌謡 『一橋論叢』七三巻三三—八—九一頁。

〔エッセイ〕館蔵「仏露字書」綺談 『一橋大学附属図書館史』二四七—二五二頁。

鳴海蔵書のことども 『窓』一五号、一三—一八頁。

一九七六年（昭和五一年）

〔論文〕「イーゴリ軍記」における色彩感 『木村彰一教授還暦記念論文集 ロシア・西欧・日本』、朝日出版社、一三—三〇頁。

ギリシャ頭巾の謎 『一橋論叢』七六巻六号、三八—四九頁。〔エッセイ〕「モスクワの二十六人の偽予言者…」その他 『一橋論叢』七六巻三三—一〇四—一〇六頁。

〔翻訳〕M・スローニム『ソビエト文学史』（池田健太郎と共

訳、新潮社、四八五頁。

一九七七年(昭和五二年)

〔編纂〕『ロシア文学案内』(灰谷慶三、島田陽と共同執筆)、

朝日出版社、四〇〇頁。

〔論文〕日本国白水壇探究——ロシア農民のユートピアについて 金子幸彦編『ロシアの思想と文学 その伝統と変革の道』、恒文社、五〇九—五三七頁。

〔魯語文法規範〕考『一橋論叢』七七卷三号、六六—七四頁。
〔エッセイ〕アフファナーシエフ略伝『窓』二二号、七一—一五頁。

〔翻訳〕N・ゴーゴリ『ディカーニカ近郷夜話』第一部、河出書房新社、九五—一三三頁。本文のほかに「解説」四二八—四三四頁。

A・アフファナーシエフ編『ロシア滑稽譚』、筑摩書房、二四二頁。

一九七八年(昭和五三年)

〔論文〕キラデスの子守歌『一橋論叢』八〇巻六号、一〇一—〇九頁。

〔エッセイ〕フィロティ村の日々——エーゲ海の子守歌と泣き歌『月刊百科』、五号、六—九頁。

ブラタナスの木の下で——ギリシャ通信『窓』二五号、三〇—三四頁。

人魚の贈りもの——エーゲ海に浮かぶ島ナクソスのフォーク

ロア『民族学』二巻三号、一〇〇—一〇六頁。

一九七九年(昭和五四年)

〔論文〕Lullabies of the Cyclades Islands. *Studies in Socio-Cultural Aspects of the Mediterranean Islands*. pp. 49-

54.

Some Greek Folk Songs of an Aegean Island Naxos. *Hittobashu Journal of Social Studies*. Vol. 11, No. 1, pp. 17-30.

名前の社会誌『月刊百科』一一号、六一—〇頁。

〔エッセイ〕モスクワの縁日『なろうと』一七、七一—一二頁。

〔解題〕鳴海完造編『ロシア・ソビエト姓名辞典』、ナウカ、三一—五頁。

レーベデフ編、除村吉太郎訳『ロシア年代記』、原書房、一一八頁。

一九八〇年(昭和五五年)

〔論文〕日本におけるロシア語辞書の歴史——江戸時代から一九四五年まで『窓』別冊、『ロシア語の辞書』、七二—七八頁。

モスコヴィヤの日本人『スラヴ研究』、二六号、一一—三〇頁。

ソエの結婚——ロシアにおける「ビザンツの遺産」にふれて『一橋論叢』八四巻六号、一一—一六頁。

〔研究ノート〕形成期オデッサ素描『地中海地域における集

落形成の諸問題』五五—六五頁。

モスクワの旧教徒たち『なろうと』三号、一一—八頁。

〔エッセイ〕ロシア食物誌『なろうと』二号、九—一六頁。

一九八一年（昭和五六年）

〔論文〕A Japanese in Muscovy. *Annuario dell'Istituto Giapponese di Cultura*. No. 22, Roma, pp. 51-61.

見えぬ町キーテジの物語——ロシアの「ユートピア伝説」をめぐって『一橋大学研究年報 人文科学研究』二二号、二一九—二九三頁。

〔エッセイ〕聖山アトス訪問記『窓』三七号、二—一九頁。

セレスのクリスマス歌謡——北ギリシャの旅から『なろうと』四号、三七—四八頁。

女流詩人ゼヴゴリーさんの日本『日本ギリシャ協会会報』一八号、四—六頁。

一九八二年（昭和五七年）

〔論文〕Kalanda—Christmas Carols in Macedonia. Report of a Field Survey. *Population Mobility in the Mediterranean World. Studies in the Historical and Contemporary Aspects*. pp. 145-155.

シチャイ事件の首尾——十四世紀ロシア・ビザンツ関係史の一断面『一橋論叢』八八巻五号、二—一三九頁。

〔研究ノート〕江戸時代後期におけるロシア詩の「受容」『ソ連の隣国関係の比較研究』（北海道大学スラヴ研究センター

一）、札幌、六六—七一頁。

モスクワ町名考『比較都市史研究』一卷一号、八—九頁。

〔エッセイ〕漂流民ゴンザの遺墨『窓』四〇号、一頁。

〔翻訳〕V. スローフ「ロスタンの丘で」『ソヴェット文学』八二号、二四—三三頁。

一九八三年（昭和五八年）

〔論文〕“Словно о полку Изгреве” и “Пловещь о доме Тафра” Сравнение с точки зрения системы цветов. S. Kimura (ed.) *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese Contributions to the Ninth International Congress of Slavists*. pp. 47-55. (© 次次の論文集に採録 A. H. Ройнсон (ред.), “Словно о полку Изгреве”. *Комплексные исследования*. М., 1988. С. 80-89.)

〔エッセイ〕ロシア音楽点描——西欧との出会いをめぐって『フィルハーモニー』一号、一四—二二頁。

一九八四年（昭和五九年）

〔論文〕ネクラソフ派カザークの祖国帰還まで『地中海論集』九号、七—二八九頁。

アタマン・ガンチャール——あるロシア旧教徒の苦難の生涯『言語文化』二二号、三—二七頁。

真説・ペテルブルグの光太夫『歴史と人物』七号、一三八—一四五頁。

〔エッセイ〕ニコライ主教の書簡二通『窓』四八号、二—八

頁。

一九八五年(昭和六〇年)

〔論文〕 石川啄木のロシア観 藤原彰編『ロシアと日本』彩流社、四三—五八頁。

長詩『サーシカ』伏字復元の試み 『言語文化』二二号、六九—八〇頁。

〔解説〕 イリヤ・ムウロメツの周辺 筒井康隆作、手塚治虫絵『イリヤ・ムウロメツ』講談社、一〇九—一二五頁。

一九八六年(昭和六一年)

〔編纂〕 *Венок Венере. Русские нецензурные стихотворения.* Apollo, 194 C.

〔論文〕 「和魯通言比考」成立事情瞥見 山田忠雄編『国語史学の為に』第二部(古辞書)、笠間書院、一一二—六頁。

十五世紀ロシア人の見たドイツ、イタリア都市——「フィレンツェ公会議への旅」の記録から 『地中海論集』一〇号、一二—一三五頁。

Мнение японского поэта Исикава Такубоку о России. Россия и Япония в исследованиях советских и японских ученых. M., C. 70-78.

〔研究ノート〕 最近のロシア旧教徒たち 中村喜和編『ロシア旧教徒(分離派)とその文化』一一—一八頁。

「ハムレット」——読解の可能性を探る 『一橋論叢』九六巻三号、一四—一四六頁。

〔エッセイ〕 北ロシアの森の中で——ウォログダ探訪 『月刊百科』二号、八一—一五頁。

ワシリーイ・ペローフの印象『窓』五六号、二—五頁。
ロシア古都めぐり『ソヴェート文学』九五号、一八六—一九三頁。

ロシアの鐘の話『ならうら』一三号、一—八頁。

〔書評〕 Murayama et al. (ed.) <Gonzalez New Slavonic-Japanese Lexicon> Tokyo, 1985. *Japanese Slavic and East European Studies*. Vol. 7, Kyoto, pp. 118-120.

一九八七年(昭和六二年)

〔論文〕 ウラルから長崎まで——ウラル・カザークの「白水境」探索紀行 安井亮平編『共同研究 日本とロシア』九三一—一〇四頁。

К вопросу о поэтике подражания в "Задонщине". *Исследования по древней и новой литературе*. Л., С. 158-162.

〔研究ノート〕 初雪と農夫と馬と……リハチョフ教授の「エヴゲーニイ・オネーギン」小注によせて 法橋和彦編『プーシキン再読』大阪、創元社、七四—七八頁。

〔エッセイ〕 鳴海旧蔵書のプーシキン初版本など 『ソビエト文学』九九号、三五—三三七頁。

〔翻訳〕 宣教師ニコライの日記『窓』六一号、一九八七、四八—五三頁、同六二号、五七—六二頁。

『アフナーシエフ ロシア民話集』(岩波文庫) (上) 三九一頁、同(下) 三九二頁。

一九八八年(昭和六三年)

〔論文〕 И. А. Юнчапов у японцев. Б. [Юнчаповский (пер.) *Ию-метамора и искусство в сущности кутьма*. С. 411-420. No. 4. С. 72-79.

Some Aspects of the Russian Pilgrimage to the Mediterranean Sacred Places. *Studies in the Mediterranean World. Past and Present*. pp. 25-35.

〔エッセイ〕 五十嵐善作タルジマへ行く 『窓』六四号、二一七頁。

〔書評〕 国本哲男他訳『ロシア原初年代記』(名古屋大学出版会、一九八七) 『ロシア語ロシア文学研究』二〇号、七八—八二頁。

一九八九年(昭和六四年)

〔編纂〕 『ロシア・ソ連を知る事典』(川端香男里他と共編)、平凡社、八〇四頁。

〔論文〕 ロシア人の聖地巡礼記——ルキヤノフの場合 『地中海論集』一二号、四一—五二頁。

〔エッセイ〕 ロシア・フォークロアの旅日記抄 『窓』六九号、六一—一頁。

足のむくまま気のむくままに……ロシア昔話の一特質 『なろうど』一八号、一—七頁。

鳴海日記のアンナ・アフマトワ——詩人生誕百年に寄せて 『窓』七二号、二—九頁。(のちロシア語に翻訳されて次の

雑誌に再録) Калзи и др. (пер.) Анна Ахматова в дневниках Наруми. Мера. СПб., 1994, No. 4, С. 72-79.)

〔書評〕 Т. Kunimoto et al. (tr.) <The Russian Primary Chronicle>. Nagoya, 1987, *Acta Slavica Iaponica*. T. 12, Sapporo, pp. 145-146.

〔翻訳〕 D・リハチエフ他『中世ロシアの笑』(中沢敦夫と共訳) 平凡社、四〇五頁。

一九九〇年(平成二年)

〔著書〕 『聖なるロシアを求めて——旧教徒のユートピア伝説』 平凡社、三〇二頁。

『おろしや盆踊唄考——日露文化交流史拾遺』 現代企画室、三〇六頁。

〔論文〕 満州のロシア旧教徒たち 中村喜和編『共同研究 ロシアと日本』二号、一七〇—一八三頁。

ロシア民衆の宗教意識『世界史への問い』六、『民衆文化』岩波書店、一九九—二四頁。

鳴海旧蔵書中の特殊ブーシキン文献 『日本ブーシキン学会会報』一二号、三八—五八頁。

ロマノフカ村の柳瀬正夢『なろうど』二二号、二二—一九頁。

〔エッセイ〕 ロマノフカ村への旅 『窓』七三号、六—九頁。

一九九一年(平成三年)

〔監修と解説〕 写真集『郷愁のロシア 帝政最後の日々』 朝

日新聞社、二〇八頁。

〔論文〕 ソ連宗教界の活性化と新たな困難 『窓』七号、窓社、七九—八七頁。

〔エッセイ〕 ロシアの旧教徒たちはいま——第三回国際シンポジウムに出席して 『月刊百科』二号、二四—二六頁。

幻の皇帝ネロのこと、その他——「日露文化交流」国際会議裏ばなし 『窓』七八号、一一—五頁。

Несколько слов о "трёхсотом покаянии" — народная психология в сказке. *Nizhobskii Journal of Arts and Sciences*. Vol. 12, No. 1, pp. 39-42.

〔翻訳〕 N・レスコフ『ムツェンスク郡のマクベス夫人』『ギャラーリ—世界の文学』一三『ロシア』、集英社、六八九—七三六頁。本文のほかに「解説」一一三七—一四三頁、「年譜」一一四四—一四七頁、「作品あらすじ」一一二五—一二七頁。

「百章」試訳(一)(松木栄三他と共訳)『一橋大学研究年報人文科学研究』二九号、三一—四八頁。

一九九二年(平成四年)

〔編纂〕 *Умбика Венера. Русские неязычные стихотворения*. Apollo, 200 C.

〔論文〕 ロシア英雄叙事詩の世界——勇士の条件 『月刊百科』三号、三六—三九頁。

『イーゴリ軍記』と『平家物語』——色彩の構造から見た比較、その他『むう』一一号、六一—二二頁。

榎本武揚のシベリア紀行 中村喜和編『共同研究 ロシアと日本』三号、一三—二三頁。

光太夫のロシア 『毎日グラフ』別冊、『おろしや国酔夢譚』七五—七九頁。

Романовка—поселок староверов в Маньчжурии 1936-1945. Н. Н. Покровский и др. (ред.), *Традиционная духовная и материальная культура русских поселенцев в странах Европы, Азии и Америки*. Новосибирск, 1992. С. 247-253.
満州ロマンフカ村回顧 『月刊百科』二二号、二二—二六頁。
〔研究ノート〕「亡命ロシア人の生涯 フォード・モロー・フ氏の場合」『なろう』二五号、一一—〇頁。

〔対談〕 ロシア望見(司馬遼太郎との対談) 『週刊朝日』一月三十一—〇日号、一六—一六七頁。

ロシア歌謡の日本伝来(五木寛之との対談)(一)——(二)『日刊ゲンダイ』二月二五日—三月一日。(のち次の書物に再録、五木寛之『よみがえるロシア ロシア・ルネサンスは可能か?』文芸春秋社、一九九二、一一九—一五二頁。)

〔書評〕 T. Bannai <Roshia bunka no kiso> (Substrata of Russian Culture). 1991, *Acta Slavica Iaponica*. T. 10, pp. 184-186.

〔編訳〕『ロシア英雄叙事詩フィリーナ』平凡社、四一—四頁。(のち抜粋して再版、『ロシア英雄物語 語り継がれた『フィリーナ』の勇士たち』(平凡社ライブラリー)一九九四、二八六頁)

一九九三年(平成五年)

〔論文〕 錢亀沢にユートピアを求めたロシア人たち——旧教徒たちの夢の跡をたずねて『地域史研究』はこだて『一七号、函館』、一一二五頁。

タタミの上の外交交渉——ラクスマン来航二〇一年目の感想
ロシア史研究会編『日露二〇〇年 隣国ロシアとの交流史』、彩流社、一三—一三五頁。

〔研究ノート〕 中世ロシアの占ト書「ラフリ」について『一橋論叢』一一〇巻四号、一七四—一八三頁。

〔エッセイ〕 ソビエトの青春とめぐりあう——鳴海完造日記から『月刊百科』九号、三二—三六頁。

ロシアの「同志」は今いずこ タワーリシチ小考『図書』二号、一九—二三頁。

ポーランド紀行一九九二年秋『なろうと』二六号、一—四頁。

ハルビン一九九三年——リラの花咲く町を訪ねて『窓』八六号、八一—一頁。

ロシア大領学の日本初印象記『新潮45』一一号、一二—二二頁。

〔書評〕 R. Morris, <Old Russian Ways. Cultural Variations among Three Russian Groups in Oregon> NY, 1991, *Japanese Slavic and East European Studies*. Vol. 14, Kyoto, pp. 63-66.

〔翻訳〕「百章」試訳(二)(松木栄三他と共訳)『一橋大学研

究年報 人文科学研究』三〇号、三—九七頁。

日露戦争時の一ロシア水兵の手記(一)『なろうと』二七号、二七—三五頁。(注は檜山真一執筆)

一九九四年(平成六年)

〔編纂〕 *Личности Великого Николая Японского*. (中村健之介、安井亮平、長縄光男と共編) 北海道大学図書刊行会、七六九頁。

『イワンのくらしいまむかし ロシア民衆の世界』、成文社、二七〇頁。

〔論文〕『北樺聞略』における日付の構造その他——大黒屋光太夫はいづ女帝エカテリーナ二世に謁したか『一橋論叢』一一二巻、二号、一一—二頁。

Справочник в Шоним. I. Грек-Pabisowa et al. (ed.) *Skupiska starobrzędowców w Europie, Azji i Ameryce. Ich miejsce i tradycje we współczesnym świecie*. Warszawa, 1994, pp. 215-218.

幕末期日露交流の一面——ゴンチャロフが見た日本人と日本人の見たゴンチャロフ『言語文化』三二号、三—一五頁。

〔エッセイ〕 ラージンの水——ドナウ・デルタのロシア人を訪ねて『なろうと』二八号、一一—一八頁。

ドナウ・デルタのロシア人『月刊百科』(上)六号、四—一〇頁(下)八号、一〇—一五頁。

金子幸彦先生のこと『ロシア語ロシア文学研究』二六号、一一六—一二七頁。

キーテジ詣で(上)『窓』九一号、二一二頁。

〔翻訳〕「百章」試訳(三)(松木栄三他と共訳)『一橋大学研究年報 人文科学研究』三一号、三一〇八頁。

一九九五年(平成七年)

〔編纂〕『国際討論 ロシア文化と日本 明治・大正期の文化

交流』(T・ライマーと共編)、彩流社、三一三頁。「まえがき」一一三頁、「シンポジウムの成果と課題」三〇一—三〇六を執筆。

〔エッセイ〕キーテジ詣で(下)『窓』九二号、六一—三頁。

他日の論正 坂内徳明、栗生沢猛夫、長縄光男、安井亮平編

『ロシア 聖とカオス』、彩流社、四一五頁。